

モスカとメッテルニヒ：『パルムの僧院』に対する バルザックの解釈をめぐって

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/6781021>

出版情報：文藝研究. 120, pp.37-59, 2023-03-14. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



モスカとメッテルニヒ

——『パルムの僧院』に対するバルザックの解釈をめぐって——

高 木 信 宏

スタンダールとバルザックとの関係は、文学作品の受容の問題を考えるうえで興味深い事例であろう。刊行直後に前者が献じた『パルムの僧院』（1839年）への絶賛と批評的考察を真摯に伝える後者の礼状は、二人が協力して第2版出版のために修正をする約束へとつながった¹⁾。さらに1840年9月25日発行の『ルヴュ・パリジェンヌ』誌に掲載されたバルザックの評論「ベール氏研究」は、これをイタリアの地で読み、心を動かされたスタンダールを、時を移さず『パルムの僧院』第2版の原稿づくりに着手させる。このように作者と読者は、厳密には直接的ではないものの、「対話」によって双方向的に影響し合い、初版のテキストから少なからず変容する第2版の姿を垣間見させるまでになる。

文豪バルザックが70頁に及ぶ「ベール氏研究」のなかで示した解釈や批評は、作者スタンダールだけではなく、後代の批評家や研究者にとっても避けでは通れない問題であり続けている。もはや『パルムの僧院』について何かを語ろうとすれば、「ベール氏研究」の存在——ジェラルール・ジュネットの表現を借りるならば、スタンダールの世界をバルザックの音域へ移調した翻訳²⁾——を意識しないことはむづかしいほど、小説と評論は分かちがたく結びついていよう。この特殊な関係性を核として、その周囲に批評言説や研究言説が、両作家それぞれの創作の方法や文学的な思想について理解を深める知見を蓄積できたことも、作品受容の歴史的な射程を捉えるうえで忘れてはならない。

たしかに、それらのなかにはバルザックの評論がもつ否定的・消極的な側面を指摘する見解が少なくなかったのも事実である。たとえば、モーリス・

バルデーシュは「ベール氏研究」に根本的な無理解を見る——「だが、結局のところ、『僧院』を見いだしたのはバルザックが最初であり、かつ同時代人たちのなかで彼一人だけだったことをどれほど恭しく讃えようとも、そしてまた彼の分析のうちで今もなお適切な、数多くの優れた指摘を考慮するとしても、次のことは認めておかねばならない。すなわち、彼は『僧院』を誤解したのだ。なぜなら、彼はスタンダールをまったく理解しなかったのだから」³⁾。つまるところ、『人間喜劇』の作者は、『パルムの僧院』に「素晴らしいバルザックの小説」⁴⁾を見たのだという。ルネ・エチャンブルもまたバルデーシュ同様に文豪による自己投影的な理解を問題視する——「バルザックは誤ってスタンダールに感嘆している。彼は小説の規則を遵守しているとしてスタンダールを称賛するが、つまりそれはバルザックの小説の規則なのだ」⁵⁾。大岡昇平が次のように言うとき、バルデーシュやエチャンブルの見方とそう隔たっていない——「惟うに『パルムの僧院』の諸人物はバルザックにより彼の養子とされたのであって、この場合彼は彼自身の創造した人物に感嘆しているに外ならぬのだ。天才にとってまことに稀有な自讃の機会といわねばならぬ。『パルムの僧院』が崇高であると同じく、バルザックの感嘆もまた崇高に達する所以だ」⁶⁾。

しかしながら、これら異口同音の見解のいずれにも、凡百の評者たちを遥かに凌駕するバルザックの強大な感化力・影響力を危惧するあまり、おそろく手厳しい論調になってしまった側面は否めない。バルデーシュにせよ、大岡にせよ、スタンダールとバルザック、それぞれの文学を深く理解していたからこそ、一種の平衡感覚をもって指摘しえたことで、だからこそ彼らは一面的で狭隘な批判に終始したわけではけっしてなく、それぞれの論考はスタンダールだけでなく、バルザックの小説と創作の特徴についても大いに示唆に富むものとなっている。

これらの批評言説の後、今日ではバルザックの「誤読」や「無理解」といった表現は文学史的・受容史的な観点から見れば、もはやその役目を終えた感がある。「『パルムの僧院』に対するひたむきな感激と讃嘆に貫かれて、作家

的共感の稀有な例」⁷⁾を示す「ベール氏研究」は、そうであるだけに本来なら不偏的立場から両作家の文学を相照らす格好の題材であろう。もちろん、その具体的な検討がけっして易しくないことは研究テーマの素性から自明だが、小論では作中人物にかんするバルザックの解釈のうちスタンダールが肯じなかった見解を起点として両者の考えが相違する背景を検討し、さらに後者の反応についての新たな解釈の提示を試みる。

1. バルザックとメッテルニヒ

「ベール氏研究」に示されたバルザックの批判的な所見についてスタンダールがどのように考え、いかに反応したのかは、同論文に対する礼状の3つの草稿のほか、シャペール本やロワイエ本などの手沢本の覚書などに読むことができる。これらのおかげで、先行研究では主として意見の対立点が個別に考察され、小説創作の理念や手法などの相違について論じられてきた。ところで、よく知られているように、スタンダールは礼状の草案で、バルザックの批判だけでなく、後者が感歎し激賞したところについても異を唱えている。ここでとりあげるのは、そのようなスタンダールの反発を呼んだ箇所、バルザックが作中人物モスカのモデルをオーストリアの宰相クレメンス・フォン・メッテルニヒ（1773-1859年）だと推定したくだりである――

この本を読了後、人が表現しうるなかで最も優れたメッテルニヒ公の肖像をモスカ伯爵のうちに認めないことは不可能である。[…] ベール氏はパルム公国の宰相の崇高な性格をはなはだ強めたので、たとえメッテルニヒ公の人生に精通した人の眼には、この高名な政治家の心が、モスカの情熱に匹敵するぐらい激しい情熱の例を、少なくとも一つ二つほど示しているように映ったとしても、メッテルニヒ公がモスカと同じくらい偉大であるかは疑わしい。モスカの人知れぬ偉大さのすべてが、メッテルニヒ公にも可能であろうと思うことは、オーストリアの宰相を中傷することにはならない。作品全体においてモスカがどのようなかについて、また、ジーナがイタリア最高の外交官と見なすこの男の行動にかんして、

この巨大な性格が充分に発揮されるためには、絶えずもちあがる無数の騒動や事件、陰謀をつくりだす才能が必要であった。メッテルニヒ氏がその長いキャリアにおいておこなったことすべては、ご覧のようにモスカが為すこと以上に並外れてはいない。宮廷において様々なことが混乱し、そして解決するように、作者が何もかも案出し、すべてを錯綜させ、それらを一つ残らず解き明かしていることに思いついたとき、人一倍果敢な精神をもち、あらゆるアイデアを熟知する人であってさえも、かかる仕事を前にすると肝をつぶし、茫然自失するほかない。私とは言えば、文学の魔法のランプを信じる次第である。⁸⁾

政治家として傑出した性格を作中で見事に展開したスタンダールに対する掛け値なしの絶賛と言っている。バルザックは実在の著名な政治家を引き合いにだし、モスカの人物像のスケールを具体的にイメージさせ、さらにパルム公国の首相がオーストリアの宰相を凌駕してさえいると強調する。

このように作中人物とその作者を讃えるのだから、ナポレオン・ボナパルトの好敵手であり、ウィーン会議を議長として成功裏に終えた同時代の大立者をバルザックが肯定的に評価していたのは言を俟たない。だが、これほどの高評価、好印象の理由には、彼が政治的には正統王朝派に近い立場であったこともあろうが、『人間喜劇』という壮大で力動感が横溢する小説世界を構築し、社会に生氣を吹き込む群像を産みだした作家であればこそ、オーストリアの宰相のうちに自らの作中人物の理想的なモデルを早くから認めていたと考えることもできよう。もちろん、そのようなものとしてメッテルニヒのイメージが醸成された背景には、書物やジャーナリズムの供する知識だけでなく、芸術家、文学者、政治家、学者、貴族など、多種多様な人士との社交や文通もまた関与しているのは確かだが、しかし何よりも文豪がオーストリア宰相の知遇をえたこともまた少なからずかかわっている。

バルザックは1832年から文通を始めたポーランドの貴婦人で、後年結婚することになるエヴェリーナ・ハンスカ夫人と、翌年9月25日に初めてヌーシャテルで会う。その4カ月ほど前、彼女に宛てた5月29日付の手紙で小説家は

オーストリアの宰相についてこう触れている——「フィッツ＝ジャム氏が私に宛ててお書きになったところでは、老メッテルニヒ公がこの物語〔『デヴォラン組頭領フェラギュス』（1833年）〕から離れられず、私の作品を次々とむさぼるように読んでいるのだそうです」⁹⁾。ところが、同年5月23日付書簡でフィッツ＝ジャムが記したじっさいの文面は次のとおり——「パリから400里も離れたところでバルザック作品が読まれていることをお知りになれば、どれほどご満悦になられることでしょう。しかし、それをメッテルニヒ氏がいつまでも許してはおかないでしょうけれども」¹⁰⁾。フィッツ＝ジャム公爵は、イタリアでバルザックの小説がよく読まれ、そのことをメッテルニヒが好ましく思っていない状況を伝えており、確かに後者が前者の存在を認知していることは窺い知れるのだが、しかしけっして好意的に受けとめているわけではない。他方、前掲した6日後のハンスカ夫人宛書簡では、オーストリアの宰相があたかも自分の小説の虜になったかのようにバルザックは書いている。両書簡の齟齬についてロジェ・ピエロは前者を小説家による潤色と解しているが¹¹⁾、そうだとすれば作為の理由は、メッテルニヒに流行作家として認識された大きな喜び、それにくわえて、まだ文通の関係にとどまるハンスカ夫人の眼に、小説家としての評価をよく見せようとする欲が働いたためと考えられる。ただし、当時フィッツ＝ジャム公爵はパリに居て、前述のバルザック宛書簡の末尾で、公爵夫人が会いたがっているが、2週間後に自分たちはノルマンディーに向けて発つ旨を記しているので¹²⁾、バルザックが5月29日までに公爵邸を訪ね、その場で宰相の読書が話題になった蓋然性もなくはない。いずれにせよ、作家がハンスカ夫人宛の書簡中で稀代の政治家の威光にあやかっている点が重要で、このことは「ベール氏研究」で彼がとった手法を想起させる。つまり、バルザックにとってメッテルニヒは、読み手への説得力を増すために引き合いにだすことのできる権威的存在だったのであろう。とはいえ、この段階ではバルザックの抱くメッテルニヒ像はまだ伝説的・想像的な次元から抜けだしてはいない。それが実質をともなって大きく変容するためには、2年後の両者の邂逅を待たねばならない。

1835年5月9日、バルザックはハンスカ夫人との再会を期し、ウィーンを目指してパリを発つ。同月16日に到着するや、20日朝にはメッテルニヒとの対面が叶う。バルザック訪問時の様子を宰相の三番目の妻メラニー・ジッチー・ファラリスが日記に書きとめている――

クレメンスは今朝、バルザックと会った。彼は次のような言葉で会話を始めた――「私はあなたの作品を何ひとつ読んでおりませんが、しかしあなたのことは存じあげております。あなたが正気を失っておられること、もしくは、他の狂人たちを話の種にして楽しんでいらっしゃることは疑う余地がありません。それに、よりいっそう酷い狂気によって、あなたが彼らを治そうと望んでおられることもまた明白です」。バルザックはこう応じた。クレメンスは的確に見抜いており、そういったことが自分の目的であって、やがて自分はそれを達成するであろうと。クレメンスは、彼が物事を見、判断する仕方に魅了されてしまった。¹³⁾

意表を突く少々挑発的で諧謔味さえある話の切り出しで初対面の相手を試し、どれほどの人物かを見定めようとする老獪な外交官の姿が眼に浮かぶ。田舎者や教養のない輩なら額面通りに受けとって怒りだすところだろう。バルザックの返答そのものは詳らかではないが、少なくとも時間を割くに値する人物として彼が宰相に認められたであろうことは、このメラニーの証言から想像に難くない。さらに彼女の日記には、この5日後に彼らが再会したことを示す記述があらわれるし¹⁴⁾、また、1835年にバルザックと親交を深めるアストルフ・ド・キュスティーヌがソフィー・ゲイに宛てた同年8月21日付の手紙には、「私はメッテルニヒ氏の屋敷でバルザックによく会いました」¹⁵⁾と記されているので、ウィーン逗留中にバルザックがメッテルニヒの住む官邸に度々招かれていたのは明らかで、それほどまでに彼は宰相とその家族の好意をえたのだろう。しかも宰相が特別の計らいで仲介の労をとってくれたおかげで、作家は5月28日にウィーン王宮の宝物館を訪れることができ、カール大帝の王冠やシャルル豪胆公の宝石類など、門外不出の秘宝を鑑賞してい

る¹⁶⁾。厚遇を受けたバルザックのほうも、おそらくメッテルニヒのパーソナリティにすっかり魅せられてしまい、それまで以上に理解を深め、親愛の情を覚えたのではないだろうか。そうであればこそ、当初4日間の予定だったウィーン滞在を、彼は6月4日まで2週間も延長したのであろう。肝胆相照の仲に達したのかどうかは不明ながらも、同年12月にバルザックはジャーナリスト、フランシス・ネットマンに向かって、「それは、我が友メッテルニヒ氏が送ってくれたヨハニスベルクのワインです」と、いささか得意げにオーストリアの宰相を「我が友 mon ami」と呼んでいる¹⁷⁾。

ウィーン滞在中に小説家が宰相官邸を訪れたある日、メッテルニヒは彼にひとつの逸話を披露した。バルザックがそれを伝記作家ジャン＝バティスト・カプフィエグに伝えたところ、後者は『両世界評論』誌(1835年10月1日号)に掲載するメッテルニヒの伝記に挿入する。これを知った宰相は大喜びで妻に記事を同封し、「私がバルザックに語った二つの結婚の奇談が記事の末尾にありますよ」と一筆書き送ったという¹⁸⁾。さらに後年バルザックはこの逸話を五幕構成の散文戯曲『夫婦学校』の結末に利用する。1839年2月24日にテアトル・ド・ラ・ルネサンス、同28日にテアトル・フランセで同作の朗読会が催され、翌月には招待客だけの私的な朗読会がオーストリアの貴婦人クーチュリエ・ド・サン＝クレール夫人の屋敷、ついでキュスティーヌ邸で開かれた¹⁹⁾。3月8日のキュスティーヌ邸での朗読会についてはウージェーヌ・ギノが『ル・シエクル』紙の学芸欄(1839年3月17日)で詳報しており、そのなかには次の興味深い一節が登場する——「作者〔バルザック〕は二番目の結末の効果を知りたかったのである。その結末は大胆かつ奇妙で訴求力があり、オーストリア皇帝閣下の首相が彼に語って聞かせた逸話から採られている。〔…〕したがって、いつの日か『夫婦学校』がテアトル・フランセで上演されたなら、サムソン氏がやって来て観客に向かってこう告げるだろう。〈皆さん、私たちが皆さんの前で光栄にも公演できた戯曲の作者たちは、バルザック氏、ラッサイー氏、メッテルニヒ氏なのです〉と」²⁰⁾。こうした創作の裏話がどのような仔細で作者からジャーナリストに伝わったのかは不明だ

が、異彩を放つメッテルニヒの名が人々の耳目を集めると後者は考えたのであろう。

こうしてみると出会いから4年が経過した後でも、バルザックにとってオーストリア宰相は過去の人ではなく、その人物像は1839年時点でも依然として精彩を失っていなかったと言えるだろう。「ベール氏研究」が書かれるのは、この翌年である。ちなみに、スタンダールはキュスティース邸でバルザックが戯曲を朗読するのに立ち会っている。朗読会后、彼はすぐに感想を短信で伝えているが²¹⁾、現在までに確認されているところでは、これはスタンダールがバルザックに宛てた書簡のなかで最も日付が若い手紙である。

以上のようにバルザックとメッテルニヒの関係を辿てくると、「ベール氏研究」においてオーストリア宰相をパルム公国の首相のモデルとする作家の見解は、たんなる思いつきでないのは明らかであろう。バルザックにとってモスカは、いわば理想化・崇高化されたメッテルニヒにほかならず、『人間喜劇』の作者は、もはやこの傑出した外交官を想起せずには「イタリア最高の外交官」の人物像を想像できず、またモスカの人物像を思い描くとき自ずとメッテルニヒのことが思い出されるといった次第であったのだろう。このような精神の働きは、およそ冷静沈着な理性による分析から生まれるものではなく、愛着と喜びとの混淆が生みだす奥深い心理的なメカニズム、いわば記憶と想像力の協働による一種の創造の営みがもたらしたのであって、〈読み〉という受容行為がもつ最も積極的な側面のひとつの顕現なのではあるまいか。バルザックが「文学の魔法のランプ」を信じざるをえない所以である。

2. スタンダールとメッテルニヒ

さて、スタンダールのほうは、1840年10月14日にチヴィタ＝ヴェッキアで『ルヴュ・パリジェンヌ』誌第3号を受けとるや否や「ベール氏研究」に目を通し、翌々日バルザックへの謝状の筆を執る。周知のように、礼状そのものは未発見で、今日読むことができるのは3通の草案だけである。16日付の最初の下書きを書いた後、その「身の毛もよだつエゴチスム」が気に入らず、

数カ所を書き写させたのが2番目の草案だったが、スタンダーはこれにも満足できず、10月28日と29日に書き直したのが3番目の草稿である²²⁾。これらは決定的なテキストではないとはいえ、文面の推移から読みとれることも少なくはなく、メッテルニヒに関係する箇所もその例外ではない。最初の草案では、オーストリア宰相について次のように言及がある――

私はラッシ氏をととてもよく知っていました。大公についてはモデルがいま
 七た。〈私はラッシにととてもよく会いました。その男はドイツ人でした。〉私は
 S[ain]t〔サン〕＝クルーの宮廷にもとづいて大公をつくりました。1810年と〔18〕
 11年、そこに住んでいたようなものでしたから。知り合いのなかから一人えらび、
 こう考えます。毎朝、幸福狩に行く術によって身についた性格〔習慣〕はそのま
 まで、もっと才気があれば、この人はいったい何をするだろうか、と。S[ain]t〔サ
 ン〕＝クルーにいた時分、Met[ternich]〔メッテルニヒ〕氏がカロリーヌ・ミュラ
 の髪でできたプレスレットを着けているのを見たことがあります。私はC[om]te
 D[aru]〔ダリュ伯爵〕のために筆を走らせていました。彼のほうは、膨大な仕事
 のさなかに私が彼の気晴らしができるように、やむをえず私に秘密を漏らしてい
 たのです。〔余白の書込み：ナポレオンがある晩、どうして参謀執務室で皆がそん
 なに笑っているのかと尋ねるために人をよこしたことがあります。〕〔…〕

私はMet[ternich]〔メッテルニヒ〕氏に復讐することなど〈の領事認可状拒否
 のことなど〉まったく考えませんでした²³⁾。私は、生じてはならないことが起き
 てしまってもまったく遺憾の念を覚えません。1880年には少しばかり私も名前が
 知られると期待しています。〈あなたには打ち明けますが、1880年には私もいささ
 か評判になるだろうと自惚れています。〉その時分にはMet[ternich]〔メッテルニ
 ヒ〕氏のことはほとんど話題にされなくなるでしょうし、〈小〉君主ならなおさら
 そうでしょう。²⁴⁾

ラッシと大公の人物モデルの話からサン＝クルーへの思い出に移り、メッテ
 ルニヒに話が及ぶが、モデルか否かの問題には触れず、同氏とカロリーヌと

の逸話を仄めかして終わっている。後段では、スタンダールのトリエステ駐在フランス領事認可状をオーストリア宰相が拒否した一件が話題になっている。これはバルザックが「バール氏研究」のなかでこの件に触れたことへの反応で、要するにメッテルニヒは眼中になく、『パルムの僧院』創作中に脳裏をよぎることはなかった、そうスタンダールは言いたいのであろう。

2 番目の下書きではメッテルニヒにかんする記述はなくなるが、3 番目の草案には最初の草稿のヴァリエントが現れる――

私は少しも Met[ternich]〔メッテルニヒ〕氏を写しませんでした。1810年にサン＝クルーで目にして以来、会ったことはありません。そのとき彼は、当時花盛りのカロリーヌ・ミュラの髪でできたプレスレットを着けていました。私は、生じてはならないことが起きてしまってもまったく遺憾の念を覚えません。私の野心は少しばかり成功することです。〈私は宿命論者ですが、そのことは隠しています。〉1860年か〔18〕80年頃には、おそらく少しは成功するかもしれないと思っています。その時分には Met[ternich]〔メッテルニヒ〕氏のことはほとんど話題にされなくなるでしょうし、小君主ならなおさらでしょう。²⁵⁾

第3草稿では第1草稿とは異なり、スタンダールはラッシヤ大公のモデルについての説明を省き、節の冒頭で単刀直入にメッテルニヒはモスカのモデルではないと言明している。つづいてサン＝クルーで同氏を垣間見た思い出、おそらくオーストリア宰相を実見した唯一の記憶を披露し、婉曲な言い回しで遺恨がないこととその理由を述べている。つまり、第3草稿は、第1草稿の当該部分をかなり縮約した内容と言えるだろう。

このように草案の推移からは、当初からスタンダールが、メッテルニヒをモスカのモデルとするバルザックの見解に反駁しようとしていたわけではないことが見てとれる。オーストリア宰相の名が最初に挙がったのは、第1草稿の冒頭から数えて5番目のパラグラフ、復讐の意図の否定にかかわる余白メモであり²⁶⁾、それを第1草稿の前掲箇所に移しかえて表現を二度改めてい

るところから考えると、スタンダーはモスカの人物造型においてメッテルニヒ個人のことはまったく念頭になく、そのことをどうしてもバルザックに釈明したかったのであろう。

オーストリア宰相をモスカの人物像の下敷きにしていないという告白の真正さは、スタンダーの著述において、特に政治的な文脈に認められる「メッテルニヒ」のイメージからも検証可能である。イヴ・アンセルによれば、ウィーン会議と神聖同盟の主導者メッテルニヒは、過激王党派の反動権力、アンシャン・レジームの狡猾な専制主義、疑い深い圧政など、「スタンダーが忌み嫌うものすべてを一身に体现している」という²⁷⁾。『ローマ散歩』（1829年）の次のくだりは、その典型的な一例であろう——「ローマは専制主義国家だ。しかし仕事は終身雇用で、誰も職を奪われない。レオ十二世の治下で、炭焼党の運動とメッテルニヒ氏が何もかも一変させてしまった。ラヴェンナとフォルリでは恐怖が支配している。最も優れた人士は投獄されるか、逃亡している。フィレンツェは、イタリアによって迫害された貧しい人々がこぞって隠れ家を求めるオアシスである」²⁸⁾。また、『ある旅行者の手記』（1839年）には、「メッテルニヒ氏の過酷な牢獄」や「メッテルニヒ氏の警察」による迫害などへの言及がある²⁹⁾。

不当な扱いという点ではスタンダー本人も被害者であり、彼はオーストリア宰相を警察国家の強大な黒幕として、その脅威を感じずにはいらなかった。1820年7月12日付のアドルフ・ド・マレスト宛書簡には、そうした切実な不安のあらわれを読むことができる——「僕は不安だ。というのは、僕が危険な自由主義者だと the cons[ul] of Mi[lan]〔ミラノ領事〕が言ったからだ。それに D[omini]que〔ドミニック：スタンダーの偽名〕が the Peint[ur]e〔イタリア 絵画〔史〕〕をつくったことは知られている。Le p[rin]ce〔メッテルニヒ〕が S[tend]hal〔スタンダー〕のことを話題にしたのだ」³⁰⁾。省略された偽名や部分的な英語の使用に検閲に対する憂慮のほどが窺い知れるが、彼の懸念は杞憂に終わることはなく、1821年にミラノで受けた抑圧、1828年の同地からの国外退去処分、さらにはメッテルニヒによるトリエステ領事

の認可状拒否など、スタンダーは厳しい措置に直面することになる³¹⁾。領事認可状拒否について作家本人は『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』（1817年、1827年）を原因に挙げているが³²⁾、じっさいは宰相が目を通したミラノ警察総局長の報告書には同書のほかに『イタリア絵画史』（1817年）や『ローマ散歩』もまた危険視されていたことが記されている³³⁾。七月革命の余波が及ぶのを警戒するオーストリア政府の調査は徹底しており、「危険思想」をもつ外交官の赴任など認めるわけがなかった。

他方、ロマネスクな作品ではどうであろうか。生前に上梓された小説のテキストのなかでオーストリアの宰相の名はただの一度も登場しない。たとえば、『パルムの僧院』でメッテルニヒがはっきりと名指されることはなく、アンセルが指摘するように、その存在はオーストリア領の国々と結びつきながら、つねに間諜、警察、シュピールベルクの背後に控えている³⁴⁾。未完の作品はどうかというと、『社会的地位』（1832年）には、一箇所だけにメッテルニヒへの言及がある——「〔…〕彼女たちはドイツ人の若い予言者の話を聞くのに没頭していた。この男をロワザンはただ単にメッテルニヒ氏のスパイと見なしていた」³⁵⁾。アンセルの解釈を裏づける一文だが、これが『パルムの僧院』以外で登場している点が重要で、というのは、メッテルニヒがスタンダーの小説世界のなか、じつはより広く潜在的に存在していることを窺わせるからである。チヴィタ＝ヴェッキア駐在フランス領事の著作に同種の文言があれば、オーストリア政府に見咎められて大いに問題となりうるので、草稿段階でのこの記述も、『社会的地位』が出版されるか、あるいは『リュシアン・ルーヴァン』に接木されて本になるかする際には、著者の自己検閲によって削除されてしまった可能性が高い。じじつ、そうした推測を裏づける先例がある。

1830年11月に書店主アルフォンス・ルヴァヴァスールに送られた書簡には、『赤と黒』（1830年）の差し替え刷りへの言及がある³⁶⁾。トーマス・フォン・ヴェーゲサックが解明したように、それらは初版第2巻の第6章と第8章に綴じられており、他方、差し替え修正前のテキストは作家の死後刊行のエッ

ツェル版に見ることができる。修正の目的は、フランス領事としてトリエステに赴任する前に、問題箇所からメッテルニヒへの皮肉めいた言及を削除することにあった³⁷⁾。以下が差し替え前の原文とその拙訳である――

Si la fatuité est pardonnable, c'est dans la première jeunesse, car elle est l'exagération d'une chose aimable. Il lui faut l'air de l'amour, la gaieté, l'insouciance. Mais, la fatuité avec l'importance ! la fatuité avec l'air grave et suffisant ! cet excès de sottise était réservé au XIX^e siècle. Et ce sont de telles gens qui veulent enchaîner l'*hydre des révolutions* !

LE JOHANNISBERG, *pamphlet*.

自惚れが許されるのは、若いときだけである。なぜなら、気取りとは楽しいことを大げさに表すことだからだ。青春時代には、恋をし、陽気で、無頓着であるような様子をしなければならない。だが、権威をともなった思い上がり！謹厳で尊大な様子の自惚れ！これらの行き過ぎた愚かしさは、19世紀に運命づけられていた。革命という怪物ヒュドラを鎖で縛ろうと欲しているのは、こうした輩たちなのだ！

ヨハニスベルク、『パンフレット』

Sa physionomie, noble et vide, annonçait des idées convenables et rares : l'idéal du diplomate à la Metternich. Napoléon non plus ne voulait pas d'officiers penseurs dans ce qui l'approchait.

その男の上品ではあっても虚な顔つきは、理にかなった考え方はするが自分では稀にしか頭を働かせないことを告げていた。まさにメッテルニヒ流の外交官の理想である。ナポレオンもまた自分に近づく者のなかに思慮深い将校がいるのを望まなかった。

Désespérant de l'Europe telle que M. de Metternich l'a arrangée, le pauvre Altamira en était réduit à penser que, quand les États de l'Amérique méridionale seront forts et puissants, ils pourront rendre à l'Europe la liberté que Mirabeau leur a envoyée.

哀れなアルタミラは、メッテルニヒが繕ったようなヨーロッパに絶望してしまい、いずれ南米諸国が強大で勢力をもった暁には、ミラボーがこれらの国々に送った自由をヨーロッパにきつと返してくれると考えるまでになっていた。³⁸⁾

最初の引用は、第2巻・第6章のエピグラフである。メッテルニヒの所領「ヨハニスベルク」を記すことで、換喩的にオーストリア宰相を想起させ、当てこする仕掛けになっている。引用のふたつ目はボーヴォワジ従男爵の人物像の説明で、ボーヴォワジは自らの思想をもたない従順な能吏といったところか。これをスタンダールが「メッテルニヒ流の外交官の理想」としているのだから、ナポレオンにも通じるメッテルニヒの権力掌握の方法を皮肉っているのだろう。最後の引用はウィーン体制への批判だが、この文には次の原註が付されている——「この原稿は1830年7月25日に書かれ、8月4日に印刷された。[刊行者註]」³⁹⁾。原註は、1830年7月27日に始まる栄光の3日間、すなわち七月革命を読者に想起させる内容であり、アルタミラによるウィーン体制崩壊の願いが、じつは革命に先立って書かれ、いわば予言となったことを刻印する記念碑的な役割をもっている。だが、スタンダールは差し替え刷りによってメッテルニヒの名を消すことで検閲の目を晦まそうとしたのであろう⁴⁰⁾。

自由主義と民主化の抑圧を目的とする1819年のカールスバート決議以後、オーストリア領において出版法による検閲制度は強化された。しかもウィーン体制下での検閲・言論統制による弾圧は政治思想のみならず、文化・芸術の領域も対象であった。前掲した1833年5月23日付バルザック宛書簡のなかでフィッツ・ジャム公爵がバルザック作品のイタリアでの好評に触れて述べ

た、「しかし、それをメッテルニヒ氏がいつまでも許してはおかないでしょう」という一文は、メッテルニヒ体制下での検閲を念頭においたものと解せよう。現実には当時噂されていたほど厳しいものではなかったようだが、オーストリア警察は外国の文学作品にも眼を光らせていたようである⁴¹⁾。興味深いのは、スタンダールが『赤と黒』以後、いずれもアンブロワーズ・デュボン書店から上梓した『ある旅行者の手記』と『パルムの僧院』で、著者名にそれまで使用頻度が高かった筆名「ド・スタンダール」を用いず⁴²⁾、「『赤と黒』の作者」とのみ表記したことである⁴³⁾。作り名をさらに隠すこの行為は、チヴィタ＝ヴェッキア駐在フランス領事が依然としてオーストリア警察の検閲を危惧していたことを示しているのであろうか。そうであるのなら、メッテルニヒは作家の意識に相変わらず暗い影を落としていたことになる。

3. 終わりに

以上の検証からは、モスカにメッテルニヒの肖像を見るバルザックの見解をスタンダールがどう受け止めたかは容易に想像できる。驚きと当惑、そして反発であろう。「ペール氏研究」を読んだ当初のスタンダールの視角に立つなら、バルザックの解釈はミヒヤエル・ネルリッヒが考えるように見当違いであるのは否めない⁴⁴⁾。だが、小論で試みたようにバルザックの観点に寄り添うならば、自らの経験を交えて導き出される独創的な考えは、「読む」という行為が孕む創造性を示していよう。しかもそれはバルザック個人による受容の次元に収まることはなく、「ペール氏研究」の読者に強く働きかける力をもつ。読者は賛同するにせよ、反論するにせよ、ジュネットのいう「翻訳」による何らかの影響を免れえまい。むろん、『パルムの僧院』の作者もまたその例外ではなかったのだが、しかしそれがバルザック解釈の否定だけで終わったわけではないことを、擱筆するにあたって明らかにしておきたい。

『パルムの僧院』の手沢本のうち、シャペール本の175頁には次のような修正案が書き込まれている――

Le souvenir du comte se mêlait à l'idée de son grand pouvoir ; ~~la comtesse~~ [Mme Pietranera] était devenue curieuse de tout ce qu'on disait de lui, les libéraux eux-mêmes rendaient hommage à ~~ses talents~~ [à son génie].⁴⁵⁾

伯爵の思い出は、彼が大きな権能をもっているという考えと一つになっていた。伯爵夫人〈ピエトラネーラ夫人〉は、彼について噂されることすべてを知りたくなった。自由主義者たちですら彼の個々の才能を〈彼の類まれな才能を〉称賛していた。

「talent」という、知的・芸術的領域で何かをするのに適した能力を指す語から、人並外れた知性、類まれな創作力を意味する「génie」の語への修正には、モスカの理想化の度合いをいっそう強める意図が間違いなく認められよう。173頁に面した白紙⁴⁶⁾への書き込みには「1840年11月4日」の日付、そして180頁のそれには「1840年11月7日」の日付が打たれているので⁴⁷⁾、175頁の書き込みはこの時期に記されたものと推測できる。つまり、これはバルザックの「ベール氏研究」以後の改削なのである。

注目すべきことに、175頁に面した白紙には、引用箇所に対するさらなる修正案が記されており、それらを先の書き込みと合わせて初版のテキストに反映させると次のようになる――

Le souvenir du comte se mêlait à l'idée de son grand pouvoir ; *Mme Pietranera était devenue curieuse* de tout ce qu'on disait de lui, *elle remarqua que les libéraux eux-mêmes rendaient hommage à son génie et le comparaient à M. de Metternich, au cardinal Richelieu, etc.*⁴⁸⁾

伯爵の思い出は、彼が大きな権能をもっているという考えとひとつになっていた。ピエトラネーラ夫人は、彼について噂されることすべてを知りたくなった。彼女は自由主義者たちですえ彼の類まれな才能を称賛し、伯爵をメッテルニヒ氏やり

シュリユー枢機卿に比べていることに気づいた。

メッテルニヒの名が、先に確認したスタンダールの「メッテルニヒ」像とは著しく異なり、肯定的・積極的な価値をもつリファレンスとして挙げられていることは文脈から明らかであろう。しかも、ここではオーストリア宰相がリシュリユー枢機卿と並ぶ扱いを受けている点も重要である。というのも、スタンダールは総じて後者の名を偉人の代表例として引くからで、たとえば、『赤と黒』第1部・第17章ではジュリヤンの才幹に感心したレナール夫人が、「ジュリヤンが法王になった姿を眼前に見、リシュリユーのような宰相になった姿を見た」とある。また、第2部・第15章では、マチルドとの深夜の密会の前、陰謀を疑い躊躇する主人公の眼にリシュリユー枢機卿の胸像が次のように映る——「その胸像はきびしい眼差しでジュリヤンを睨むかのようだった。フランス人の性格として当然なければならぬ、あの大胆さに欠けていることを咎められているような気がした」⁴⁹⁾。作家の念頭にあるリシュリユーは、フランス史上で最も卓越した政治家に数えられるだけでなく、豪胆な人物の典型でもあったのだろう⁵⁰⁾。この偉人に肩を並べるようにメッテルニヒの名が挙げられるのは、スタンダールのすべての著述にあって、まさしく異例と言ってい。

このように作家の「メッテルニヒ」像が変容した背景を探るとき、前掲の白紙への書き込みが記された時期が看過できない意味をもつ。そこには、「à son génie」という表現が含まれていることから、175頁余白の書き込みよりも後に記されたものであるのは明白で、したがって1840年11月以降、すなわち「ベール氏研究」以後に問題の語句は案出されたと推定できる。この点を踏まえるならば、作家の筆先で不可解にも一変したメッテルニヒ氏の評価にはバルザックの見解が多少とも関与したのではないか、そう考えることも許されよう。

そればかりではない。「ベール氏研究」の次の一節は、そうした見立てを裏づけるのではあるまいか——「小説〔『パルムの僧院』〕のこの部分全体は、

類例がないほどの文学的堅牢を誇っている。[……] ついに我々は正劇をえたのだ。それは最も完璧で、何よりも人の心をつかみ、このうえなく奇妙でもあり、まさしく真実そのものであって、人間の心のなかをこれ以上ないほど深く掘り下げたドラマなのである。かつて誰もこうした劇を考えついたことはなかったが、しかしいくつかの時代には確かに実在したのであり、ルイ十三世とリシュリユーが、フランツ二世とメッテルニヒ氏が、ルイ十五世とラ・デュバリエ、そしてショワズール氏が、すでにこの劇を演じたように、いずれは時の流れのなかで再来し、再び演じられることになる⁵¹⁾。リシュリユーとメッテルニヒの名が、文学的な主題として同等の高い価値をもって並置されているのを認めるならば、「バール氏研究」を読み、スタンダールがバルザックの考えにいささか歩み寄ったと仮定することは決して不可能ではあるまい。もちろん、オーストリア宰相はパルム公国の宰相のモデルでないことに変わりはない。だが、件の礼状を書いた後も作家はなお、小説の改訂を念頭において、改めてバルザックに助言を請うたように、その意見を容れる寛容を失ってはならず、また頼りにもしていた⁵²⁾。メッテルニヒの位置づけの変化は、「バール氏研究」がスタンダールの想像力に新たな着想をあたえた結果であるならば、我々はここにも創造的な受容——しかも両作家が相互に影響しあう受容——の痕跡を認めることができようか。

註

＊）本稿は「JSPS 科研費：課題番号20K00473」の助成を受けた研究の一部である。

- 1) Voir François BRONNER, « À propos de l'exemplaire de *La Chartreuse* offert par Stendhal à Balzac », *L'Année stendhalienne*, n° 6, 2007, pp. 349-353 ; voir également Nobuhiro TAKAKI, « Une lettre d'outre-tombe : Balzac et l'édition Hetzel de *La Chartreuse de Parme* », *HB. Revue internationale d'études stendhaliennes*, n° 18, 2014, pp. 355-368.
- 2) Voir Gérard GENETTE, « Stendhal », in *Figures II*, Paris : Éd. du Seuil, coll. « Tel Quel », 1969, p. 173.
- 3) Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris : La Table ronde, 1947, p. 415.

- 4) Voir *ibid.*, p. 421 ; voir également Philippe BERTHIER, « Balzac et *la Chartreuse de Parme* : roman corrégien », in *Stendhal et Balzac*. Actes du VII^e congrès international stendhalien (Tours, 26-29 septembre 1969). Textes réunis et présentés par Victor DEL LITTO, Aran : Éd. du Grand Chêne, « Collection stendhalienne 12 », 1972, p. 175.
- 5) René ÉTIEMBLE, *Essais de littérature (vraiment) générale*. 3^e édition revue et augmentée de nombreux textes dont plusieurs inédits, Paris : Gallimard, 1975 [1974], p. 263.
- 6) 大岡昇平「バルザック『スタンダール論』解説」、『わがスタンダール』所収、講談社文芸文庫、1989年、65頁（初出、バルザック『スタンダール論』（大岡昇平訳）、小学館、1944年）。ちなみに、大岡がバルデーシュやエチャンブルに先んじてバルザックの解釈の孕む問題を指摘していたことは注目に値する。
- 7) 大岡前掲論文、64頁。強調は引用者。
- 8) BALZAC, « Études sur M. Beyle (Frédéric Stendhalh [sic]) », in *Écrits sur le roman*. Textes choisis, présentés et annotés par Stéphane VACHON, Paris : Librairie Générale Française, 2000, pp. 210-211.
- 9) BALZAC, *Lettres à Madame Hanska. 1832-1844*. Édition établie par Roger PIERROT, Paris : Robert Laffont, 2 vol., 1990, t. I, p. 39.
- 10) BALZAC, *Correspondance*. Édition établie, présentée et annotée par Roger PIERROT et Hervé YON, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 3 vol., 2006-2017, t. I, p. 797. 強調はフィッツ＝ジャム。
- 11) BALZAC, *Lettres à Madame Hanska, op. cit.*, t. I, p. 39n. Cf. Jacques-David EBGUY, Entrée « METTERNICH, CLEMENT-LOTHAIRE, PRINCE DE », in *Dictionnaire Balzac*. Sous la direction d'Éric BORDAS, Pierre GLAUDES, Nicole MOZET, Paris : Classiques Garnier, 2 vol., 2021, t. II, p. 835.
- 12) BALZAC, *Correspondance, op. cit.*, t. I, p. 798.
- 13) Roger PIERROT, *Honoré de Balzac*, Paris : Fayard, 1994, p. 257.
- 14) Voir *idem*.
- 15) *Ibid.*, p. 258.
- 16) Voir *ibid.*, p. 259.
- 17) *Idem*.
- 18) Voir *ibid.*, p. 257 ; voir également Marcel BOUTERON, « Une année de la vie de Balzac (1835) », in *Études balzaciennes*, Paris : Jouve, 1954, pp. 158-161.
- 19) Voir BALZAC, *Correspondance, op. cit.*, t. II, p. 1132.
- 20) Spoelberch DE LOVENJOUL, *Autour de Honoré de Balzac*, Genève : Slatkine Reprints, 1973 [1897], p. 149.

- 21) Voir BALZAC, *Correspondance, op. cit.*, t. II, pp. 461, 462 et 1132 ; voir également BALZAC, *Lettres à Madame Hanska, op. cit.*, t. I, p. 481.
- 22) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition V. DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E SLATKINE, Paris : Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-1999, t. VI, p. 415n.
- 23) 最初この一文は、「私は Met [メッテルニヒ] 氏のことなどをまったく考えませんでした」だったが、ついで「私は Met [メッテルニヒ] 氏に復讐することなどまったく考えませんでした」に修正された後、「私は Met [メッテルニヒ] 氏の領事認可状拒否のことなどまったく考えませんでした」となった (*ibid.*, t. VI, p. 405n)。
- 24) *Ibid.*, t. VI, pp. 405-406. 強調はスタンダール。以下、スタンダールによる字句の挿入、または字句の削除後の訂正は〈 〉で示す。
- 25) *Ibid.*, t. VI, pp. 412-413.
- 26) 問題のヴァリエントは、「あなたの愛する画家たちは別ですが、1950年頃には誰も彼らの名前を頭に浮かべることはないと思います」(*ibid.*, t. VI, p. 400) という本文にかんする書き込みである。その内容は次のとおり——「あなたの後で。50年後、文学剽窃者のだれそれが断章を出版するでしょう。／文体については、私のことを傲慢さの怪物だと思われることでしょう。／偉大なメッテルニヒに復讐しようなどと考えたりはしませんでした。20年後に報復できればと思っています。その時になれば、人々は彼のことをほとんど話題にしないでしょうし、ましてや大公についてはなおさらです」(*ibid.*, t. VI, p. 414)。これを見ると、当初は後世の評価にかんする文脈でメッテルニヒのことが作家の念頭に浮かんだが、草案を書き進めるうちに、モデルにかかわる箇所ですら再び宰相の話になったので、余白に記された最初のアイデアはテーマ的な連結から後の文脈のほうに生かされたのであろう。
- 27) Yves ANSEL, Entrée « METTERNICH », in *Dictionnaire de Stendhal*. Publié sous la direction de Y. ANSEL, Philippe BERTHIER et Michael NERLICH, Paris : Libr. Honoré Champion, 2003, p. 445.
- 28) STENDHAL, *Promenades dans Rome*, in *Voyages en Italie*. Textes établis, présentés et annotés par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1973, p. 603.
- 29) STENDHAL, *Mémoires d'un touriste*, in *Voyages en France*. Textes établis, présentés et annotés par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1992, pp. 226 et 378.
- 30) STENDHAL, *Correspondance générale, op. cit.*, t. III, p. 290. 引用箇所の原文は次の通り。
« Je suis inquiet because the cons[ul] of Mi[lan] has said that I am a periculous libéral et

l'on a su que D[omini]que avait *made the Peint[u]re*. Le p[ri]nce *has spoken of S[ten-
dh]al*. »

- 31) Voir Michael NERLICH, Entrée « AUTRICHE/AUTRICHIENS », in *Dictionnaire de Stendhal, op. cit.*, pp. 78-79.
- 32) Voir STENDHAL, « Notice sur M. Beyle, par lui-même » dans *Vie de Henry Brulard*. Texte établi, annoté et préfacé par Victor DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, Nouvelle édition établie sous la direction de V. DEL LITTO et Ernest ABRAVANEL, Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967-1974, t. XXI, p. 451 ; voir aussi STENDHAL, « Notice autobiographique » dans *Souvenirs d'égotisme. Documents biographiques*. Texte établi, annoté et préfacé par V. DEL LITTO, in *ibid.*, t. XXXVI, p. 173.
- 33) Voir Armand CARACCIO, « Avant-propos bibliographique et critique » pour *Promenades dans Rome*. Texte établi et annoté par A. CARACCIO. Préface de Henri de REGNIER, in *Œuvres complètes, op. cit.*, t. VI, p. CXXXV.
- 34) ANSEL, *op. cit.*, p. 445.
- 35) STENDHAL, *Une position sociale*, dans *Romans et nouvelles*. Texte établi, annoté et préfacé par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes, op. cit.*, t. XXXVIII, p. 388.
- 36) STENDHAL, *Correspondance générale, op. cit.*, t. III, p. 784.
- 37) Voir Thomas von VEGESACK, « Les cartons de *Rouge et Noir* », *Stendhal Club*, n° 75, 15 avril 1977, pp. 260-263.
- 38) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, Paris : J. Hetzel, 1846 pp. 243, 244 et 262.
- 39) *Ibid.*, p. 262n.
- 40) 初版における当該箇所¹の修正後のテキストを以下に挙げる (STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*, par M. de Stendhal, Paris : Libr. Levassesseur, 2 vol., 1831 [1830], t. II, pp. 66, 69 et 104)。

« Leur haute mission est de juger avec calme les petits événements de la vie journalière des peuples. Leur sagesse doit prévenir les grandes colères pour les petites causes, ou pour des événements que la voix de la renommée transfigure en les portant au loin. GRATIUS. » 「彼らの重要な使命は、民衆の日常生活に起こる小事件の数々を冷静に判断することである。とるに足らない原因のせいで、あるいは、出来事が風聞に遠く運ばれて歪曲されたせいで、民衆の激しい怒りが噴き出すことがないよう、彼らの英知が未然に防がねばならない。グラティウス」

« Sa physionomie noble et vide annonçait des idées convenables et rares : l'idéal de l'homme aimable, l'horreur de l'imprévu et de la plaisanterie, beaucoup de gravité. »

「その男の上品ではあっても虚な顔つきは、理にかなった考え方はするが自分では稀にしか頭を働かせないことを告げていた。愛想のいい紳士の鑑であり、意表をつく言動や冗談を嫌悪し、やたらと勿体ぶっている。」

« Désespérant de l'Europe, le pauvre Altamira en était réduit à penser, que, quand les États de l'Amérique méridionale seront forts et puissants, ils pourront rendre à l'Europe la liberté que Mirabeau leur a envoyée. » 「哀れなアルタミラは、ヨーロッパに絶望してしまい、いずれ南米諸国が強大で勢力をもった暁には、かつてミラボーがこれらの国々に送った自由をヨーロッパにきつと返してくれると考えるまでになっていた。」

- 41) 塚本哲也『メッテルニヒ——危機と混迷を乗り切った保守政治家』、文藝春秋、2009年、251-263頁を参照。オーストリアの検閲制度については次も参照——生田真人『ウィーンの演劇と検閲』、郁文堂、2004年、5-28頁。メッテルニヒはカールスバートの決議に対するフランスのジャーナリズムの批判を押さえ込むために自ら積極的に工作をおこなっている (voir Guillaume DE BERTHIER DE SAUVIGNY, *Metternich et la France après le congrès de Vienne*, Paris : Hachette, coll. « Bibliothèque des recherches historiques et littéraires », 3 vol., 1968-1971, t. I, p. 245.
- 42) スタンダールは1817年出版の『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』で「ド・スタンダール」の筆名を初めて使用した後は、『ラシーヌとシェークスピア』(1823年)、『ロッシニ伝』(1824年)、『工業家に対する新しい陰謀について』(1825年)、『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』第3版(1827年)、『アルマンズ』(1827年の初版は匿名、1828年第2版で「ド・スタンダール」)、『ローマ散歩』(1829年)、『赤と黒』(1830年)などの著作でこの筆名をもちいている。
- 43) 当時、パリの新聞や雑誌に掲載された『ある旅行者の手記』刊行の告知や書評の大半はスタンダールを作者として扱っている (voir Louis ROYER, « Avant-propos » pour *Mémoires d'un touriste*. Texte établi et annoté avec un avant-propos par L. ROYER. Préface de Jean-Louis VAUDOYER, in *Œuvres complètes, op. cit.*, t. XV, pp. LXIX-LXXX). このことから明らかなように、「『赤と黒』の著者」という一種の煙幕がフランスの文壇ではまったく効果がないのは明らかで、もちろんそのことをスタンダールは百も承知であつただろう。そうであるだけに、オーストリア検閲局の検閲官向けに仕掛けられた戯れとも挑発とも見做す余地がある。
- 44) Voir NERLICH, *op. cit.*, p. 79.
- 45) STENDHAL, *La Chartreuse de Parme*, par l'auteur de *Rouge et Noir* [Exemplaire interfolié Chaper], Paris : Ambroise Dupont, 2 vol., 1839, t. I, p. 175. なお、アメリカ合衆国モルガン・ライブラリー所蔵のシャペール本の写真複製を参照した。
- 46) 修正用にスタンダールは各頁に白紙を綴じた自家用本を作る習慣があり、シャペール

本もそうした手沢本のひとつである。

- 47) *Ibid.*, t. I, folio en face de la page 175 et folio en face de la page 180.
- 48) Voir *ibid.*, folio en face de la page 175. 引用箇所では修正部分をイタリック体で示す。
 自筆書き込みの読解にあたってはヴィクトル・デル・リットの転写を参照した（voir Victor DEL LITTO, « Transcriptions », in STENDHAL, *La Chartreuse de Parme. Exemple interfolié Chaper*. Préface, transcriptions et notes par V. DEL LITTO, Paris : Cercle du livre précieux, 3 vol., 1966, t. III, pp. 74-75. だが、デル・リットの転写では、「elle remarqua que les libéraux eux-mêmes rendaient hommage」に続く「à son génie」が抜けており、また「comparaient」が「comparait」となっている。
- 49) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir. Chronique du XIX^e siècle*. Textes établis, présentés et annotés par Yves ANSEL, in *Œuvres romanesques complètes*. Préface de Philippe BERTHIER. Édition établie par Y. ANSEL et Ph. BERTHIER, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 3 vol., 2005-2014, t. I, pp. 436 et 650.
- 50) リシュリユー枢機卿の名は、『赤と黒』第2部・第33章のエピグラフにも登場する——
 「腕の悪い宝石職人がそのダイヤモンドをカットして、燦然たる輝きを少々そこねてしまった。中世において、いや、リシュリユーの時代でもなお、フランス人は意志する力を持っていたのだ。／ミラボー」（*ibid.*, t. I, p. 739；強調はスタンダール）。ここでも枢機卿の名は、「意志する力 la force de vouloir」という肯定的・倫理的な価値と結びついている。
- 51) BALZAC, « Études sur M. Beyle (Frédéric Stendhal *[sic]*) », *op. cit.*, pp. 220-221.
- 52) 『パルムの僧院』の改訂をめぐるスタンダールとバルザックの関係の紆余曲折については前掲の拙論を参照。